



# 烈風の魔札使と召喚戦争

2

森田季節  
イラスト クロサワテツ



# 烈風の魔札使と 召喚戦争

2

森田季節  
イラスト クロサワテツ



### サーラウネ

リッカを幼い頃から妹のようにかわいがっている霧の大精霊。  
意志を持つ〈固有存在〉として戦線で召喚される。その体から発する空気は敵の〈召喚霊〉や魔札使にとっては毒にもなる。



*Sarlavne*

### 鷹津エイジ

「元」都内の高校三年生。カードバトルの腕を買われて、カードによる召喚が現実に行われる異世界“ネオアルカディア”に英雄として迎えられる。初戦での活躍を認められて、正式に侯国の騎士の地位についた。



*Eiji taketsu*

## キャラクター紹介

### フィエナー・レクラウス

リカール侯国の侯女。弱冠16歳にして騎士団の将軍をつとめる魔札使でもある。最前線に立ち指揮官として騎士たちを統括する。



*Fienare Cleuse*

### リッカ・ザルスホスト

名家の生まれで、リカール侯国騎士にして召喚学のエキスパート。侯国を救うため、エイジを“ネオアルカディア”に召喚した。リッカだけの特別な魔法【想念の代行者】を使う事ができる。



*Rikka Salzbest*



### アルティア・セルゲイン

国の危機に瀕しているサクラッド王国の王女。王女としての責任を感じており、頼りない父親の王に代わって、策略を練る。

*Arthia Selgane*

### マユ・ファンダイク

たった11歳のリカール侯国騎士団の副官。防御的な障壁を多数召喚。お菓子が大好きで、いつも飴を舐めている。見た目も嗜好も子供そのものだが、魔札使としての実力は騎士団の全員が認めている。実家はパン屋さん。



*Mayu van Dyke*



### 豊春芹香

“ネオアルカディア”の人間だが、優秀な人材を探すために日本に高校生として紛れこんでいた。エイジに異世界の存在を紹介した人物であり、エイジが再戦を熱望する相手でもある。その行動は魔札使の領域をはずれている。

*Serika Teijoharu*

### ベルセネ

アルティアの侍女であり、親衛隊長。ベルセネの母親がアルティアの乳母だったため、身分は違えど、アルティアとは姉妹のような環境で育った。



*Belcene*



## 魔札使の入門書

# A introduction of marje



## 【カードの属性と特徴】

ネオアルカディアのカードは、それぞれ特徴が異なる8つの属性に分類することができる。また属性は、それを象徴する固有色を持っている。

### 白 天界の属性

この世界の真理そのものが具現化した属性。天使・天人などの召喚霊に多くみられる。

### 青 広海の属性

あまりに広く、あまりに深い海の属性。海洋生物の召喚霊に多くみられる。

### 紫 精神の属性

ネオアルカディアの様々な概念を非<sup>ひこころ</sup>属性。実体を持たないような召喚霊に多くみられる。

### 赤 大地の属性

大自然の強さと恐ろしさを体現する属性。野生動物やドラゴン、オーク、オーガ、ゴブリンなどの召喚霊に多くみられる。

### 黄 加護の属性

絶対者から人間に与えられた恩寵<sup>おんちゆう</sup>を示す属性。一般の兵士や市民の召喚霊に多くみられる。

### 緑 生命の属性

世界中に根付いている木々の力を表す属性。植物や一部の昆虫の召喚霊に多くみられる。

### 黒 邪悪の属性

憎悪などの負の感情が元となる属性。闇から生まれたような召喚霊に多くみられる。

## 灰 人造の属性

人為的に造られた属性。魔力さえ豊富であれば、どの属性の魔札使<sup>マジ</sup>でも使用することが可能である。

## 【カードの種類】

カードには大きく分けて6つの種類があると考えられている。この6種を組み合わせてデッキを構築するところから、戦略がはじまると言える。

### 1. エナジーボトル

魔力を生み出す根幹となるボトル。ボトルとあるが、容器の形状は様々である。また、どの属性の要素も含まない透明なエナジーボトルもある。

### 2. 召喚霊

魔札使が召喚するカードバトル内だけの擬似生物。敵を攻め、我が身を守るのに必要である。膨大な種類のものが存在する。

### 3. 結界

戦闘中の空間にとどまり、カードバトル全体に影響を及ぼすカード。敵だけ、味方だけに影響するような効果の狭いものと、その場のすべての魔札使と召喚霊に影響する大がかりなものに分けられる。

### 4. 憑依物

召喚霊やエナジーボトル、稀に結界に付着して、その力を高めたり、異常を起こさせたりするカード。

### 5. 易術

比較的少ない魔力で、常時使用が可能な一回で使いきりのカード。相手の行動を阻害するものもここに含まれる。〈精神の属性〉に数が多い。

### 6. 大術

大がかりな効果を発揮する一方で、一定の精神集中時間を必要とするため、相手に対応するような使い方ができないカード。〈大地の属性〉などに数が多い。

「まるで牧場だな」

「牧場はおおげさでしょ。これぐらいの規模なら、ほかの街でもありえるわよ」

「俺の住んでた世界では輸送は鉄の車を中心だったからな。馬はあんまり使っていないだ」

「エイジ、そのニホンの話はやめなさい。身分がばれたらどうするの」

リックが渋い顔をしてたしなめた。

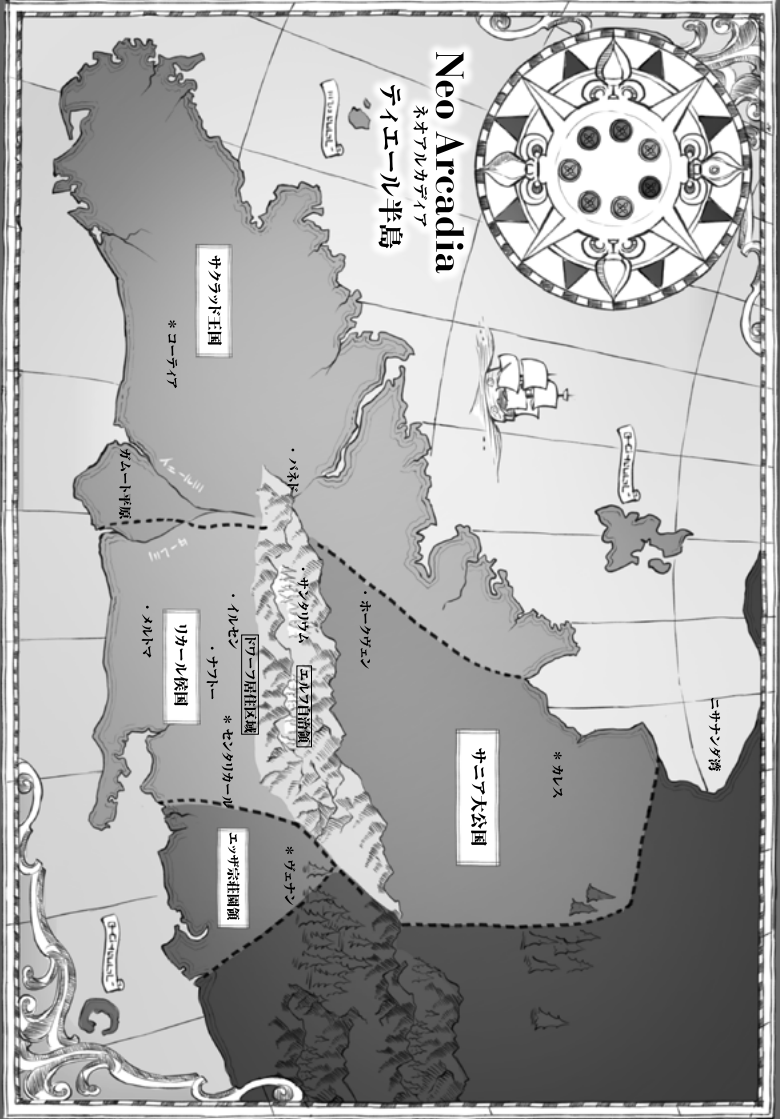
Pr

## プロローグ

ガムートの会戦——リカール侯国（さうこく）がサクラッド王国に大勝した戦いから九日後。エイジとリックはガムート平原北部の王国の街、バネドにいた。

バネドは「分かれ道の街」と言われている。東に延びるリカール侯国への街道と、北に向かうサニア大公国への街道がここで分岐するからだ。道が分かれるY字路には目印となる大きなニレの巨木が植えられている。

街の入口には宿駅用の馬が何頭もつながれていて、たまに風流れて厩舎（うまや）のおいが漂ってくる。顔をしかめる者もいるが、そこそがバネドの繁栄のしるしだった。



二人はいずれはじまるコーティア進攻に向けて、宿営地の選定にやってきていた。この街は侯国の都市ヤカからも近く、軍勢を留め置く拠点のひとつと目されていた。

もちろん選定はお忍びのだが。

ネオアルカディアでは人間の体を暴力で傷つけることはできないので、身元がばれたからといって殺されることはないが、人間の拘束ぐらいならできる。敵国の魔札使だと知られてはまずい。

「悪い、悪い。ついつい元いた世界のことを思い出しちゃうんだ。ホームシックつてやっだな」

とてもそうは思えない、軽い調子でエイジは答える。

「もう！ 本当に反省しなさいよ」

「ああ、気をつけるさ、愛する妹」

「わ……わかっているわよ……お、お兄ちゃん」

つかえながら、しぶしぶしぼり出すようにリツカは返事をする。□元は屈辱のせいなのか、引きつっている。

尋ねられて、まさか騎士二人で旅をしていると答えるわけにもいかない。「旅をしている兄妹きょうだいという設定」で二人は都合よく誤魔化していた。服装も騎士団の制服ではなくて、善良で凡庸な市民の格好だ。

「何よ、お兄ちゃんって……」

イライラしているのか、そうっとリツカはエイジの靴を踏んだ。ただ、エイジもそれぐらいで、ムツときたりはしない。

「あれ、兄妹って『設定』を言い出したのはお前だろ」

「ほ、ほかに年頃としごろの男女が出歩く理由なんてないじゃない……」

この世界の価値観では、うら若い未婚の男女がごく自然と連れ立って歩くなんてことは考えられない。駆け落ち中のカップルか、放浪の旅芸人か、それでもなければ、娼婦しょうふとその買い手と見なされかねない。

栄えある貴族のリツカからしたら、選択肢になりようがないほどすべてが不名誉だった。業務と割り切るにしても耐えがたいものがある。

ただ、それは血がつながってなければという話だ。兄妹が出歩くことぐらいはありうる話だった。

「役割」だろうと「設定」だろうと、血のつながってないほうを選びたくなかったリツカが兄妹のほうを強く主張したのだった。

「俺はかりそめでもお前と恋仲だって思われてもいいけどな」

足を踏まれたまま、エイジは涼しい顔をしている。

「なによ、女の子になんて興味なくて、カードばかり見ているくせに……」

「そうだな。お前に一本とられたよ」  
 リッカが相当腹に据えかねていたらしく仏頂面ぶつどうめんになっていたので、はからずも二人はいかにもな兄妹げんかをしているように見えた。  
 宿营地としてのバナドの価値は申し分なかった。まず、ほかの宿場街と比べても宿の数が多い。

侯国に友好的な宿があるという噂うわさはうかがっていたが、そちらも大当たりだった。リカール侯国出身というだけで、宿代をまけてやると言い出してきたぐらいだ。侯国軍が宿营地にしたがっていると話すと、二つ返事でうちに任せろと心強い返事をもらえた。  
 スムーズに仕事を終えた二人はもちろんその宿に泊まり、街の酒場で食事をとることにした。

「おめがねにかなう宿が見つかってよかったわね」

「身柄を拘束されたりしなくてよかったな。逮捕歴はないままにしたい」  
 だが、その酒場のほうでひと悶着もんじやくあった。

小さな二人がけのテーブルで料理を待っていると、丸太のような腕をした中年男がからんできた。

「お前、侯国の人間だろ。このまま王国を倒してくれよ。あんな王様じゃどうしようもねえ」

いかにも大酒飲みの風貌ふうぼうだが、酒自体には強くないのか、顔が赤い。子供が見てもわかる酔っ払いだ。

「そうだな、俺も妹もそうなければいいなと思ってる」

「本当は平和なほうがいいんだけどね」

自分を誤魔化しつつ、エイジとリッカも話を合わせる。

「おっちゃん、侯国は優秀な魔札使まじりがたくさんいるから大丈夫さ。霧の大精霊きりを扱うリッカとかな。前回のガムートの会戦もリッカの活躍で勝って言うぜ」

自分の名前が出たことに、リッカは恥ずかしいような、茶化さかされているようで腹が立つような変な気分になった。

でも、エイジのいたずらということはわかるので、やっぱり腹が立つのがまさった。後ろからエイジをつねった。

「あれ、なんか、妹に怒られてるぞ、あんた」

「ああ、気にしないでくれ。妹は気が短いんだ」

「よし、景気づけに飲もうぜ！ 三杯は俺がおごってやる！ 王国からたんまり戦時下の特別税はふんだくられてるけどよ、それぐらいの金はあるんだ！」

まだ手をつけてないだろう、なみなみと満たされたジョッキがエイジに向けられる。

「ああ、俺、酒が飲めないんだ」

まだエイジは日本なら高校二年生だ。それに、曲がりなりにも敵国で酔うつもりなんて毛頭なかった。素面しよふへでしないとイケない仕事がいくつでもある。

「あ？ そんなわけないだろう。お前、おしゃぶりは卒業してるだろ」

男の目つきが少し悪くなる。男の知り合いで、その年で酒を断る人間なんて一人もいなかった。

「俺の住んでた地域は特殊でな、二十歳未満は酒を飲めない決まりがあったんだ。それとな、悪いけど、おっちゃんより俺、忙しいんだ。酔ってる暇なんてない」

バカ正直にエイジは断る。

こんな時、エイジには穏便に物事を収めようだなんて発想がないのだ。

「お前、俺の酒が飲めねえってのか！」

酔っ払いが声を荒らげる。完全に管を巻いている。

「ねえ、一杯ぐらい飲めばいいじゃない……」

リックが横から妥協点を探ろうとする。ジョッキで殴られてもケガをすることはないが、服に酒をかけられたりしたら面倒だ。

「おっちゃん、あんたも経験あるだろ。飲みたくもない酒を勧められても美味うまくないんだよ」

「ああん？ 飲みたくもない酒なんてあるわけねえだろうが！」

これはもう解決は望めそうもない。リックも諦あきらめた。今更、エイジが飲むことなんてないだろう。

「はあ……こんな時だけ石頭なんだから……」

店から助けを呼んでもらうしかない。ただ、店内にいる男は、いづれも細身の弱そうな体つきばかりで、熊くまのような酔っ払いを止められるようには見えない。何かあったら逃げ出そうとしているのか、腰が浮きかけていた。

しかし、助けは向こうから勝手にやってきた。

「まったく、恥ずかしくて、見ていられませんわ」

違うテーブルで食べていた少女があきたような高い声を出した。

エイジやリックより、さらに二つ三つは若いだろう。服装は街の娘のような姿だが、不自然なほどの威厳がにじみ出していた。最低でも街の責任者の娘か、大商人の令嬢といった感じだ。

「酔って旅人からむだなんて。檻おろにでも入れておいたほうがいいですわね」

独り言ではないらしい。その証拠に立ち上がってエイジたちのテーブルの前までやってきた。冷ややかに酔った男を見つめた。

緊迫した空気が酒場に走る。

「嬢ちゃん、何者か知らないが、お前には関係な——」

その少女は男の手からジョッキの酒の量を減つた——一気にそれを口に運んだ。見る見るうちにジョッキの酒の量は減っていく。

男やエイジたちがあつけにとられるなか、少女は酒を空にして、ジョッキをテーブルに力強く置いた。

「この旅人たちの代わりに、わたくしが飲みましたわ。これで文句はありませんでしょう?」

ほかの席から拍手が起こった。店中が小さな英雄の誕生を祝した。酔った男も立つ瀬がなくなり、自分の席に戻っていった。

「助太刀、感謝するよ」

エイジは騎士団で学んだ礼儀作法で少女に頭を下げた。

「せっかくだし、場所を変えて、お茶でもどうか。あのおっちゃんも俺たちが帰ったほうが気が楽だろ」

「それも悪くないですわね。でも、バネドのことなら、おそらくあなた方より詳しいですわ。ゆっくりとくつろげる店をご案内いたしますね」

「君みたいな人にめぐりあえてうれしいよ。この酒場に来て、正解だったな」

「少しお待ちください。一応許可を得ないといけませんの」

いつのまにか、少女の後ろに控えていた付き添いらしい女性が困ったような表情を浮か

べていた。

そんな女性も、少女と目が合うと、微笑みながらうなずいた。付き添いというより、従者という言葉のほうが似合うような仕草だった。

酒が飲めない人間用にお茶を出す店もバネドにはあった。宿場なので、飲食店が一箇所に固まっている。

地元の庶民向けというよりは、宿場を通る商人や役人のための、しゃれた内装の店内にされた。

「ありがとう、本当に助かったわ。お、お兄ちゃんは本当に強情だから……」

「ああ、ありがとな。おかげで旅先で嫌な思い出を妹と作らずにすんだ」

「お互い様ですわ。王国の者として放っておけなかつたので、割って入っただけのことです」

わずかにその少女は頬をゆるめた。どちらかというところ、感情の変化を表に出さない性格らしい。リッカとは対照的だ。

「斜陽の国にも、まだ君みたいな豪傑がいるんだな。いや、烈女と言ったほうがいいか」  
エイジも手放して少女をたたえる。

「斜陽ですって?」



ただ、その言葉に少女はひっかかったらしい。

「たしかに沈んでいるように見えるかもしれませんが、王国はまだ死んではいませんわ。それに太陽は沈んでも朝になれば、また昇りますのよ」

少女の瞳がさっきの酔っ払いに向けられた時のようになる。

「今、侯国が王国を押しやっているのはまぎれもない事実。ですけれど、侯国のほうも決して万全とは言えませんから。攻防をともしに行うには兵力が足りない。必ずしも一枚岩の国でもない。このような危うい調子であれば、いづれひと波乱あるでしょう」

「つまり、王国は滅びませんってことかな？」

エイジは相手の真意を探るように、そう尋ねた。

「滅びないというか、滅んではいけないのですわ。それはこれまでの王国の栄光が無と変わるのと同じ。どれだけの犠牲を払おうと、それは止めねばなりません」

「君はずいぶんと王国に思い入れがあるんだな」

「わたくしは王国の民ですから。当然のことです」

少女の目に強い意志の光が宿る。立派な言葉を語り、雰囲気には酔っているわけでもなく、本心からそう思っているらしい。

「侯国の者も恥を知るべきです。侯国は王国の中の小国家、子供のようなものですわ。子供が親に理を説くならともかく、殺そうとするなど、道義にもとる行為。いづれ、その

しっぺ返しを侯国にも訪れるでしょう」

エイジはそうつとそばのリツカに目を向けた。

苛立っているのがすぐにわかった。

そろそろ「道義を無視しているのは王国のほうよ！」などと啖呵を切りかねない。

(これは切り上げたほうがいいな……)

わざわざ知らない相手と話して不快な思いをする意味もない。

(まだまだ、王国にも愛国者がいる。そういうことがわかっただけ、収穫だと思えばいいな)

頼んだお茶はまだ残っていたが、ここから早く出るほうが大切だ。

「じゃあ、俺たちはそろそろ宿に戻ろうかな」

テーブルに手を載せて、ゆっくりと立ち上がるエイジ。

「君、相当名のある貴族だろ。お忍びの旅か何か？ 街娘の雰囲気じゃない」

「名のるほどの者ではありませんわ。いえ、名のるのはわたくしばかりでは不公平といったほうがいいでしょうか」

「どういう意味かな」

まるで謎かけだ。

「あなた方のほうこそ身分を偽っているのですもの」

リツカの顔が少しひきつった。

「どうして、そんなことがわかったの……？—— あっ」

思わず尋ねてしまい、リツカが口を押さえる。そんなことをしても出ってしまった言葉は戻っては来ない。

(ボロが出ちゃったな)

エイジも最悪、リツカの手をとって、店を出るところまで頭に思い描いた。相手の対応次第では通報でもしかねない。

「あなたたち、兄妹きょうだいというけれど、駆け落ちのカップルなのでしょう？ 『妹』さんのほうが、しきりにわたくしに敵意の目を向けていましたわ」

「はっ？」

リツカの表情が一度リセットされた。

「彼をとられるのではないかといぶかしんでいた証拠ですわね。もう少し妹らしくしないといけませんわよ」

「ち、違うわよ！ そんなわけないでしょう！ お、おお……大ハズレもいいところだわ……はは……」

侯国のスパイと思われるという最悪の事態は防げた。

なのに、リツカは情けないほど、しどろもどろになっていた。

「わ、わたしたちはね、カップルなんかじゃなくて、本当はね——」

「なんだ、ばれちゃったか」

エイジが悪ノリ半分、リツカのフォロー半分で口をはさんだ。

「家の許しが得られないから、逃げ出してきたんだ。愛し合う二人の仲は隠しきれないみたいだな」

リツカは顔が真っ赤になって、もう言葉も出ないというありさまだ。

おかげで、少女から疑いをかけられる危険は冒さずにすみそうだ。

エイジはまだ座っているリツカの肩に手を置いた。

「ほら、宿に戻ろうか。早く、お前と二人きりになりたいんだ」

「ふざけないで！」

リツカはぼかぼかエイジの背中を叩いた。

店を出たあと、ずいぶんエイジはリツカから文句を言われた。

「なんてことを言い出すのよ……。恥ずかしくて死ぬかと思ったわ……」

「仕方ないだろ。あの調子じゃ、お前、身分明かしかねなかったからな」

「そうかもしれないけど……」

「それにしても、敵は腐っても大国だな」

「何のこと？」

「さっきの子みたいなのが何十人も敵にいたら、攻略は思ったより難しいぞ」  
 気転と度胸。

あの少女にはその二つが備わっていたとエイジは思う。

「ああ、それなら大丈夫よ」

けれど、リツカはエイジに同意はしなかった。

「やけに自信たっぷりだな」

「だって、この世界で戦えるのはわたしたち魔札使<sup>マジジ</sup>だけだもの。カードが使えないお嬢様が束になっても、王国の魔札使は動かせないわ」

「けど、もし、ああいう子が魔札使を動かしたとしたら——」

エイジは途中で言葉をとどめた。

「さすがにそれはないな」

## Turn 1

### 権謀術数

バナドの街にエイジとリツカが偵察に入る四日前のこと。

ガムートの会戦から数えて五日。

リカール侯国の首都、セントリカールでは前のガムートの会戦<sup>さいせん</sup>の論功行賞が行われていた。

「エイジ・タカツ、貴殿を本日をもって庶騎士<sup>しよきし</sup>から大騎士に昇進させる。侯国のために、より一層の奮起を期待する。侯国騎士団長、フイエナール・クラウズ」

鷹津<sup>たかつ</sup>エイジはこれまでの活躍を認められ、大騎士となった。

侯国の騎士階級は聖騎士・宗騎士<sup>そうきし</sup>・勝騎士<sup>しょうきし</sup>・大騎士・庶騎士の五段階。ただし勝騎士以上は極めて少数なので、昇進の速度だけを考えれば異例のスピード出世だった。

もっとも、エイジが来て以来、異例の進撃を侯国が続けているというのもあるが。戦争に負けてばかりでは、功績も生まれようがない。

「では、エイジ・タカツ、庶騎士のナイフを返還するように」

「こちらでございませす」

エイジはうやうやくしく侯女フィエナーレに庶騎士の波型紋様のナイフを渡す。それと引き換えに菱型紋様の大騎士のナイフが渡される。

人を殺傷するという力を失い、まさに権威の象徴だけになったナイフだ。

まだ、騎士の昇任儀礼は続く。

リックが宗騎士というマユ一人しかいなかった地位についたのだ。

宗騎士の三日月型紋様のナイフを手にしたリックはプライドを満たされたのか、かなり得意げだ。喜色満面と言っているいい笑みにすべてが示されている。

儀礼のあと、リックがエイジのほうに寄ってきた。

「エイジ、あなたの力は認めてあげる。でも、わたしに並ぶのはまだまだ先みたいね」  
自慢したくて仕方がないみたいに、リックは鞆たもとに納まったナイフをちらつかせる。

だが、エイジのほうはうらやむこともなければ、褒めることもない。かといって、見せびらかすなど怒るわけでもない。

単純にエイジは興味がないのだ。

「ああ、悪いけど、俺、身分にこだわりがないんだ。俺の生まれた国だと、表面的にはみんな平民だからな」

「もう……。何よ、これじゃわたしが身分にばかり拘泥こうでいしている三流貴族みたい……。冗談でもいいから悔しそうにしてくれたっていいじゃない……」

エイジの反応が薄くて、リックはすねたようにそっぽを向いた。

「いや、昇進したのはめでたいけどさ、勝騎士しきしだろうと宗騎士だろうと、リックが前の戦いで活躍したことは誰だれだって知ってるだろ。あの栄光を誇ればいいんだよ」

真顔でエイジは答える。

リックの力がなければ前の戦いで勝つことはできなかった。そのことはエイジもよく知っている。

リックの秘策、【想念コンセプションの代行者】によって王国方を壊滅させることができた。その力がなければ、数で勝る王国に押し負けていただろう。

「わざわざ、そんなこと、真面目まじめに言わなくていいのよ、バカ……」

「リックさん、昇進おめでとうございませう！」

そこにマユが入ってきた。くさむらのバツタみたいに跳ねて、リックに飛びつく。

「これでマユと同じ宗騎士ですね！」

「マユ、宗騎士の先輩としてよろしく頼むわね！」

「このマユにお任せ下さい！」

リックとマユは手を取り合って、ぴよんぴよん小躍りしている。

（日本だと女三人寄ればかしましいって言うけど、二人でもうるさいもんだな……）  
一人蚊帳かの外のエイジがそんな様子を眺めていた。



「エイジさんも昇進おめでとうです！」

「ああ、でも、俺はおめでたいと思うのは王国を倒してからでいいや」

「それなら、時間の問題なのです！ 王国はもう長くはもたないですよ。余裕の飴玉三個  
一気食いなのです！」

「それはさすがに健康に悪いだろ……」

マユは腰のポーチから飴玉をころころと手のひらに出した。

「あっ！ 出すぎたです！ 五つも出ちゃったです！ まあ、いいです！ 五つとも食べ  
ちゃうです！」

（なんか、ブレス○アを出す日本の子供みたいだな……）

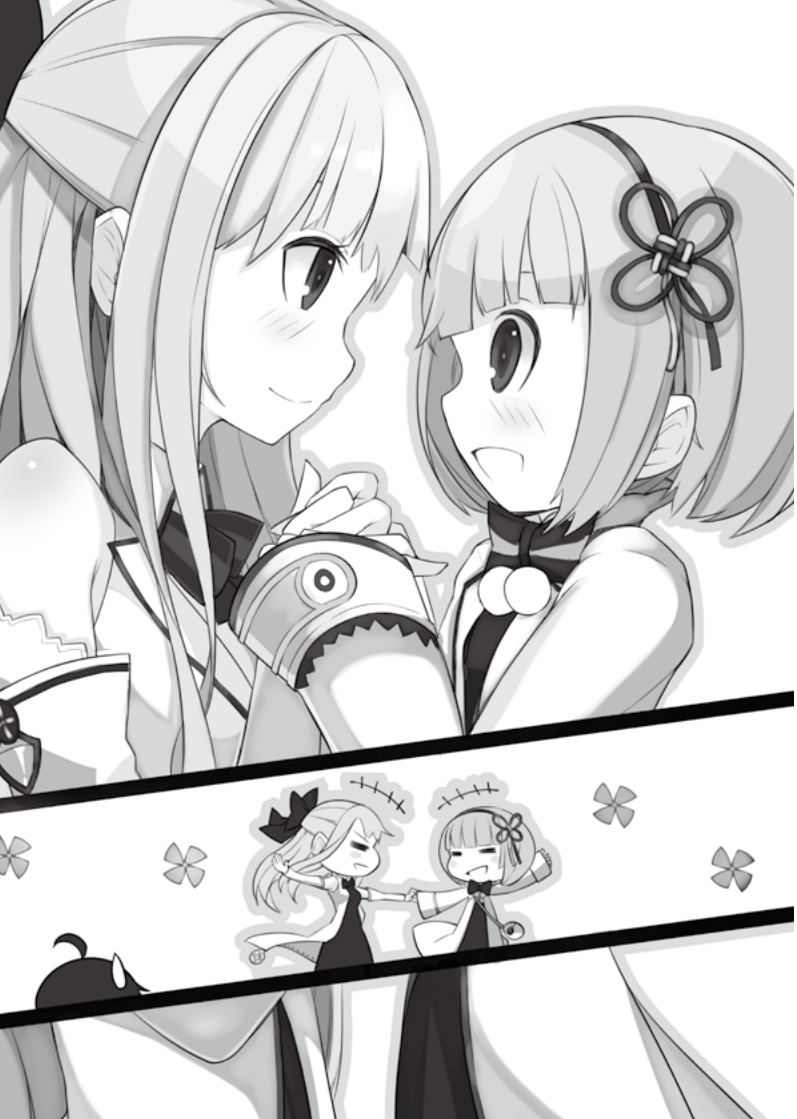
ただ、エイジもマユにあまり気を抜くなよと言いつらくもあった。王国が青息吐息なのは事実だ。これから侯国を圧倒するような戦いはできないだろう。

「あれ、エイジさん、あんまり楽しくなさそうな顔してますね。何かありましたか？  
飴玉舐めます？」

マユからすると、エイジの態度は変に見えるらしい。頭に大きな「はてな」が浮かんで  
いる。

「そうだな、嫌なことがあったわけじゃないんだけどさ」

「エイジの悪い癖が出てるわね」



あきれたようにリツカはつぶやいた。

「エイジってさ、ピンチの時ほど楽しそうな顔してるのよ。この国に来た時も、目がギラギラしてた。その反対で、勝てそうな勝負だと血がたぎらないのよ」

「ほう、へえ、ふうん」

やたらとマユはこくこくとうなずいている。

教師を見るような目で、リツカの顔を見つめている。大きな目がくりくりと動いた。

「リツカさんって、すごいのです。驚天動地なのです」

「おおげさすぎるわよ、マユ」

「そんなにエイジさんのことをじっくり見てたんですね」

「えっ……」

リツカの顔が青くなる。青というか紫だ。何かの拍子に血の気が引いてしまったらしい。

「へ、変なこと言わないでよ！　じろじろ見てたわけじゃないわよ！」

「マユ、ちょっと、騎士団の皆さんに報告してきます！」

マユが冗談半分で敬礼のポーズをとる。

それからくりと背中を向けて、駆け出していこうとする。

「やめて！　デマを流すのはやめて！」

リツカが手を伸ばして、マユのコートをどうにかつかむ。

マユの情報拡散能力は筋金入りなのだ。つまり、おしゃべりなだけなのだが。

「あわわわ、こけちゃうのです！」

後ろから引つ張られたせいで、マユの足が宙をばたばたと舞う。そのまま、前に転んだ。

「あ、ごめ——ひゃっ！　わたしもこけちゃう！」

リツカもマユに釣られて、一緒になって転んでしまった。

そばを通りかかったひげ面騎士のアンフェルスが、

「おいおい、この国の宗騎士二人が同時にこけて大丈夫なのか？　不吉なことの前触れ

じゃなきゃいいけどな」

下品なぐらい声をあげて笑っていた。

一方、ずっと横にいたエイジは神妙な顔つきでいた。ほとんど、二人のことも見ていない。

「俺、そこまで顔に出てるのか」

あんまり露骨に悟られてしまうのはよくないよな、とエイジはちょっとだけ反省した。

「カードゲーマーとしては二流だな。ちゃんとなおしていかなきゃ、そのうち身の破滅につながる」

表情をわざと暗くするために、エイジは長いため息を吐いてみた。

凱旋がいてんと時を同じくして、侯国の使者は王国側に戦争関係者の処罰などを含んだ三十項目におよぶ弾劾状だんがくじょうを出した。

戦争関係者に処罰を求める中には、サクラッド王ウエルジド三世の退位も暗に示されていた。

予想通り、王国側はその弾劾状が無効だと使者に突き返した。

そのために、侯国側は王国が呑めないような要求を入れていたのである。

「あの王様、今頃いまごろよほど恐れているでしょうね」

使者が戻ってくると、侯女フィエナーレはくすくすと重臣と騎士が居並ぶ場で笑った。

この弾劾状の案を起草したのは彼女だった。

「あの王のことでですから、主戦派だった貴族だけ罰する内容などを送りつけたら、そのまま受諾しかねませんからね。最低でもこちらの国土を荒らされた分の借りは返させていた  
だきませんと」

ただ、重臣の中からは早く適当な条件で降伏させて、戦争を終わらせたほうがいいのではという意見も出た。

「あんな右も左もわからぬ子供のような王を、のさばらせておけば同じ過ちを何度も繰り返すでしょう。こちらが掌握できる王にすげかえねばなりません。王国から魔札使マジツクシがいなくなったわけではありません。放っておけば、また攻めてきますよ」

その場に居合わせたエイジも首を縦に振った。

王国が手を出した時点で、王国か侯国かどちらかがつぶされるまで戦いは続くのだ。

違いがあるとすれば、本当に国が消滅するか、形の上では存続するか、それだけだ。

「では、皆さん、王国首都のコーティア占領の作戦を練りましょうか——と言いたいところですが」

フィエナーレがやさしく微笑ほほえむ。

「王国の領内で、どうしても宿营地が必要なのです。どなたか、身分を偽って様子を見ていただけませんかね」

その視線は自然とエイジのほうに向けられる。

「姫様、そんなに俺にスパイをやらせたいんですか？」

エイジも笑いながら、それにこたえる。

「適材適所ですよ。こういうことは、いかにもあなたはお好きそうですから。じつとして  
いるよりは、この世界のいろんなところをまわりたいでしょう？」

「おやおや。俺の心が読まれているみたいだ」

二人のやりとりで重臣の一部は鼻白む。その言葉の応酬は、まるで気心の知れた男女のもの  
のようだったからだ。

鷹津たづエイジの言葉は全体的に傲慢ごうまんであり、不遜ぶそんだった。けれども、薄皮一枚のところ

不敬には当たらない。侯女フィエナーレのほうもそれを楽しんでるようだった。根本の部分で、この二人の考え方は似ていた。

きれいごとと現実を区別して考えつつ、どちらも無視はしない。一を聞いて十を知るとまではいなくても、相手の言葉を聞けば思惑まで伝わっている。

「エイジさん、あなたが敵でなくて本当によかったですよ。もし、敵だったら、あらゆる手段を使って、力を封じていますもの。肉体的には殺せなくても、精神的に、政治的に、軍事的に何もできなくさせようとしたでしょう」

「俺も姫様のようなお美しい指導者の顔を歪ませずにすんでよかったですよ」

騎士たちは今更どうとも思っていないが、そうでない者からしたら卒倒しそうな内容だ。「それでは、エイジさん、よさそうな宿营地を見繕ってくださいな。だけれど、異世界出身のあなた一人では、少し不安も——」

「わたしもついて行きます！」

勢いよく、リックカが手を挙げた。

「エイジを異世界から呼び出したのはこのわたしです！ わたしが責任を持ちます！ ちようどバナドの宿場は親侯国派だという話も聞いています！ 行って確かめてきたいと思えます！」

その声、むしろ裂帛れつぱくの気迫に、騎士たちの目が一斉にリックカに向けられた。

リックカの首筋からは小さく汗まで伝っている。

「そうね……。リックカに行ってもらおうかしら……」

フィエナーレも少しあつげにとられていた。

「それじゃ、マユも行きます！ 行ってみたいです！」

マユが手を挙げながら、ジャンプする。エイジはライブ会場の客みたいだと思った。

「え……………マユも来ちゃうの…………？」

リックカの口元がすかかふるえた。

「スパイってなんかわくわくします！ 面白そうで——ひゃっ！」

マユの頭を女騎士のニューセが後ろから押さえた。

「二人で行ってきたらいいんじゃない？ 副官はちゃんと本拠地にいてもらわないとね」

「そうだな、それにスパイの人数が多かったら危ないしな」

「マユはこつちで預かるから……」

ほかの騎士からマユの留守番が強く打診された。

「ええと、では……作戦はお二人にお願いいたしますね……」

フィエナーレは多少あきれながらも、それを了承した。

リックカはどうリアクションをとっていいかわからないまま、頬ほほを赤くしていた。

騎士からは「見せつけてくれるわね」とか「二人きりにしてやるべきだろ」とか言った



声が飛びかっている。

(どうも、不穏な空気が騎士団から上がってるんだけど、何だろ……)

エイジは気味の悪いものを感じつつも、何も言えないでいた。

八月十二日 晴れ

リックマンとエイジマンは旅立って行きました。マユモ行先がわかったのに、みんなに止められました。なんでなんでしよう。マユはもう子供じゃないからお荷物にもなりません。お荷物じゃないからこそ副官なのです。二人の上司として、しつかりサポートできるのです。なのに、みんなは「だからお荷物なんだ」と変なことを言うのです。

納得がいかないので、おいしいお菓子をお土産に買って来てくだまいとお願ひしました。やけ食いするのです！

◇ ◇ ◇

時はエイジが大騎士に昇進するよりも少し前にさかのぼる。

ガムートの会戦で王国が侯国に記録的に大敗した直後のこと。

王国滅亡が現実味を帯びてきた頃、足早に王国首都のコーティアを抜けて、北の大公国

へと道を急がせる四台の馬車があった。

「ペルセネ、追手は来ておりますの？」

馬車の中、黒いドレスをまとった少女がつぶやく。

追手という剣呑な言葉の割には、他人事のように落ち着いて、窓の外を見ている。そんなもの、自分の行く手をさえぎることなどできないと信じているようですらあった。

「アルティア様、今のところは大丈夫かと」

ペルセネと呼ばれた少女——ただし、アルティアという名の少女よりははるかに長身ではあるが——がわかりきったことのように答えた。

栗色の髪は邪魔にならないように横でひとまとめにくくってある。前髪も目にかからないところで切り揃えていて、化粧つけけよりも実用性ばかりを意識した髪型のようなだ。ただ、髪から飛び出しているとがった耳が変に靈惑的な印象を与えていた。

大きな襟とボリリュームのある袖が特徴的なクラシカルなシャツに、黒いビスチェワンピース。黒いロングブーツとの間にのぞくふとももがまぶしい。

彼女は侍女兼親衛隊長。一歳上の乳母子で、幼い頃からアルティアの姉のような立場で育ってきた。そして、王国少将の地位にある高位の魔札使でもあった。

「そうですね。わたくしのことを考える余裕など誰にもありませんでしたものね」

「アルティア様のことを考えていたのは、我々十名の親衛隊だけでしょう」

冗談とも本気ともつかない声でペルセネは言った。  
アルティアの薄紫の髪は馬車に入りこむ風で横に流れていた。風はやさしく穏やかだが、彼女の表情は硬い。

沿道に田舎の村の家並みが見える。疲弊している。暮らし向きが決して薬でないのは、漂う空気でわかった。

「ティエール半島全域に覇を唱え、『皇帝陛下に次ぐ者』とすら呼ばれたサクラッド王国が、こんな醜態をさらすだなんて。恥辱以外の何物でもありません。民にどう謝罪をすればいいのかわかりませんわ」

つらそうな顔でアルティアは目を閉じた。

国の様子を見ていられないとでもいうように。

「アルティア様がお生まれになる前から、国はこの有様だったはずですよ。そこまでご自身を責める必要はございません」

「それでも、為政者の娘として窮状に手が打てなかったのは、わたくしの咎とがも同然。わたくしは立ち上がらねばならないのです。この命が果てようとも」

「お戯れたむでもそのような不吉な言葉をお使いになりませんよう」

ペルセネが眉まゆをひそめた。

「アルティア様は私が命を賭かしてお守りいたします」

「ペルセネ、あなたの言葉も大差ありませんわよ」

王女と侍女の二人は向かい合った馬車の中で小さな声で笑った。

アルティアは銀製の小物入れをふところから取り出し、しばらく見つめていた。そこには王家の紋章が彫られている。

開くと、小さな紙に粉が包まれている。

二人は毒ナスを粉末にした毒薬を携帯していた。もし、進退窮まった時は毒を仰いで自決するためのものだった。

「そんなものを使う必要があるような運命が我が主君に訪れませんか」

ペルセネが祈りの言葉をつぶやく。

アルティアは銀製容器をぱたんと閉じる。

「ご心配なく。必ず、王国を立て直しますわ。そして、侯国を討ちます」

「サニア大公国領に入りました」

静かにアルティアはペルセネに向けてうなずく。

自分たちにとっての戦争のはじまりだ。

「まずは大公国を味方にいたしますわ」

王女アルティア一行はサニア大公国の副都ホークヴェンに入った。

ホークヴェンは人口一万ほどの内陸の小さな街だ。広い国土を統治するために、この街が軍事拠点とされたことがあり、それがそのまま副都という形で残っていた。

慣例的に、ホークヴェン周辺の統治は次期大公が行うことになっている。このあたりは人口も少なく、内陸のため外国との貿易の問題も起こらない。まずはここでノウハウを学んでから、大公に就けということなのだろう。

だが、本国の王女にあたるアルティアがホークヴェンに来た際、大公国の者たちはこぞって嫌な顔をした。もちろん、王女の目の見えないところではあるが。

この少女が国内に火種を持ちこむことが容易に想像されたからだ。

サニア大公国は本来、王国の一部をなす地域であり、国王から任命された大公が国を統治している。それゆえ、本国から戦争参加の求めがあれば従うのが当然である。

だが、サクラッド王国の力はすでに弱く、侯国に滅ばされようとしていた。ここでもうかつに滅びそうな国の肩入れをするのはごめんだと多くの者が感じていた。

ホークヴェンに入ったアルティアたちは首都カレスにいる大公トリアノス二世との面会の約束を取り付けようとしたが、風邪で体調がすぐれないという返事が戻ってくる有様だった。

あまり関わりたくはないが、すげなく追い返すわけにもいかない。いわば、離れて住んでいた親が子供のところに金の無心に来たようなものだった。

いつ治るかわからない風邪を待つ余裕はない。アルティアはホークヴェンを統治している大公の息子であるマツケーロとの面会を求めた。

マツケーロは二十五歳。次期大公となるべき男であったが、若さゆえの全能感か、マツケーロは言動が激しく、トリアノス二世は息子を嫌っていた。そのせいか、トリアノス二世はほとんど息子に実権を委譲しておらず、余計に陰悪な空気を作ってしまった。

ホークヴェンも任されているというよりは追いやられているという感が強い。

ただし、王国に対する基本政策は二代にわたって、変わりがなかった。

「おお、これはこれは王女みずからいらっしゃるとは……。歓迎いたします……」  
マツケーロはなかなかアルティアと目を合わせようとしなかった。ただ、視線は名残惜しように、時折アルティアを盗み見た。

「殿下、現在、王国は侯国に攻められ、危機的な状況にありますわ。どうか、援軍を出していただけないでしょうか」

「そう……そうですわね……軍を編制するには時間がかかって……」

ぜひともなどとは言えない。そもそも軍事指揮権は大公子息ではなく、大公にあるのだから当然と言えば当然だ。意欲があろうとなかろうと彼一人で勝手に決められることはない。

大公国の下には休暇と称して、多くの王国の貴族が逃げこんできていた。そのため、大

公国側は王国の現状を詳しく把握していた。

王国は侯国に余計な手出しをして、自滅しているにすぎない。子供の獣だと思ってちよっかいを出したら、逆にかみ殺されそうになっているところか。マッケーロもそのように考えていた。

だが、いつまでも態度表明をしないわけにもいかないのだった。

侯国が完全に王国を滅ぼせば大公国とて立场上、抗議するしかない。大公国を兄だとすれば、侯国は弟、王国は父親である。弟が父親を殺しているのを見て、へらへら笑ってはられない。

かといって、侯国と戦争をするのは避けられるなら避けたい。

大公国にとって一番ありがたい筋書きは、王国がどういう形であれ存続することだった。体制が変わらないのであれば、それを追認すればよいだけだ。その可能性がありうる以上、大公国はじっと待つ姿勢だった。

(わたくしたちが面倒な来客であることぐらい、百も承知ですわ)

冷やかにアルティアは十歳以上年上のマッケーロのことを見ていた。

「このままではいずれ王国は滅びますわ。そうなれば、王国を見捨てた大公国の名も地に墮ちましょう」

「王女、軍を出したいのはやまやまなのですが……僕は魔札使<sup>マジツクシ</sup>ではあるが軍事大権がなく

……」

頭を下げながら、マッケーロはちらちらとアルティアを見た。その視線には熱いものが混じっている。

彼はアルティアに恋情を抱いているのだった。すでに大公嫡子として二人の妻がいる身ではあるが、その程度で収まるものではなかった。アルティアの美しさは別格だった。

黒いドレスがアルティアの白い肌を余計に白く見せていた。以前から他国の外交官が、「いずれ、小国の一つや二つ、傾けてしまうほどの美貌<sup>びぼう</sup>を持つ姫になるでしょう」と本国向けに書き綴<sup>つづ</sup>っていたが、それは偽りではない。

もっとも、当時の慣例に従えば、第一王女が大公の家などという自分の臣下のところに嫁ぐことなどありえない。対等な王国以上の王や王子のもとに嫁ぐのが政略結婚として自然なことだ。

マッケーロにとってみれば手に入らない果実。

しかし、マッケーロの気持ちをアルティアは見抜いていた。自分にどんな視線が投げかけられているかぐらい、わかる。

アルティアは息を呑み——

それから右手を胸に当てた。

「もし、国が守られましたら、あ、あなたの第三夫人になってもよろしいですわ」



大公側の人間数名から驚きを示す声が漏れた。

「お、王女、その言葉に偽りはないですね……」

大公子息のマッケーロも声がふるえている。

「ええ。王国を保てるのであれば、先例などいくらでも覆してやりますわ。先例とは国があつてこそそのものですから」

アルティアの目は取引相手の顔を見据えている。

まさにこれは取引だった。それ以上の感情の色は見えない。

「ただし、王国が滅べば空手形となりますので、ご了承下さいませ。その時にはわたくしも王女ではありませんから。もっとも、軍事大権のない殿下では、軍を動かすことはできないでしょうが」

「僕にお任せ下さい」

血走った目でマッケーロは言った。

「必ず、王国をお救いしてみせましょう。大公国にとって王国は親。親を救うのは子のつとめですからな！」

「そのお言葉、どうか信じさせて下さいませ。わたくしもウソをつかれる方のもとには嫁ぎたくありませんから」

丁重を極めた礼法で王女は頭を下げた。自分より対等以上の者にだけにするような作法

だ。精巧な人形のようなアルティアの体から、幼さの残るなまめかしさが漂う。

「え、ええ……。もちろん。僕があなたにウソをつくことなどできるでしょうか……」

「ならば、誓いの指輪を授けましょう。手をお出しになって」

アルティアは中指に二つはまっていた指輪を一つ外す。

そして、やさしくマッケーロの手をとって、その指輪を小指に入れてやった。

マッケーロの息が荒くなった。動揺が明らかで貴族にしては見苦しい所作だった。

「援軍はすぐには必要ありませんわ。王国首都のコーティアが敵の手に落ちたら、コーティアに進撃してほしいのです。わたくしはその間にもう一手から攻撃を開始いたしますから」

「もう一手とは……?」

「侯国首都こうこくのセンタリカールをその北、エルフの自治領域から攻めますわ。エルフの支配範囲は大公国と侯国両方の山地に広がっていますでしょう?」

「たしかに、あんな深い山や森の土地など連中に貸してやっても困りはしませんからな」

「彼らは侯国に臣従しんぞうしていません。人が戦争で死んだ時代、侯国に苦しめられた歴史もありますし。必ず味方に引き入れられますわ」

エルフと侯国本国の仲が決して良好でないことは周知の事実だった。エルフたちは歴史的に何度も自分たちの土地を「割譲かじやう」している。

「それで、大公家の名前で森へ入る通行許可証をいただきたいのですが」  
「わかりました。こちらとの折衝役をしているエルフに、道案内をするよう書状を作りましょう。ただ、エルフ自治領にここからまっすぐ南下して入ることは不可能です。一度、街道を通ってバネドまでお戻り下さい」

「ありがとうございます。お心遣い感謝いたしますわ」  
「ようやく、アルティアはぎこちなく笑った。

「あの……王女」

「何でしょうか、殿下」

「先ほどの誓いのくちづけをいただけないでしょうか」

アルティアの表情が曇った。恥じらいとためらい、それと苦悶くもんで、頬ほおが赤く染まる。

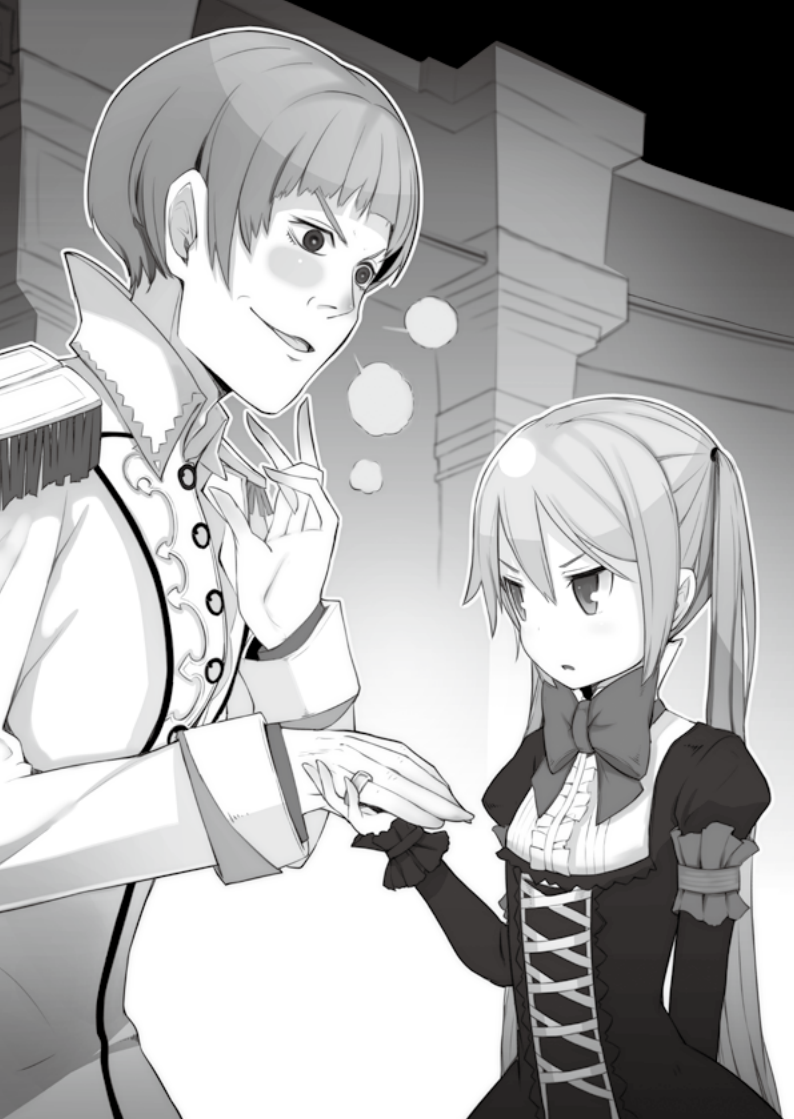
それでも、アルティアは落ち着きを取り戻して、

「それでは誓いとしてお渡しした『ここ』に」  
指輪に軽くくちづけた。

「ここから先は、約束が果たされてからにいたしましょう。あなたが王国を救った際に」

二日後、大公国内では早朝から激震が走った。

マッケーロが首都カレスにいる父親の大公トリアノス二世を幽閉して、軍事権を掌握し



た。もともと不仲が囁かれていた親子だったが、実際に動かしたのはアルティアの美貌だった。

その報がホークヴェンまで届いた直後、アルティア一行はバネドに向けて進みだした。「ペルセネ、ずいぶんと渋い顔をしていますわね」

「アルティア様があのようになつたら男の妻になると約束したのですから、つらくないわけがありません……。しかも、対等な国同士ですらない……。属国ではありませんか……。あんな者の手がアルティア様に触れると想像しただけで怖気が走ります」

ペルセネはマツケーロとのやりとりを思い出したのか、表情を濁らせた。

「使えるものは使わねばなりません。出し惜しみをできる立場ではないのです」

「もちろん、それは存じておりますが」

「こはこらえない……。わたくしもこらえているのですから……」

アルティアも恥辱と恐怖で身をふるわせていた。

属国の君主など、つまり臣下でしかない。名分にうるさいアルティアが平気でいるわけがなかった。

遠方の王国に嫁ぎ、そこで子を産み、国母となるのが、第一王女の人生であるはずだった。過去にも第一王女は皆、そのように生きてきた。

なぜ、自分はこんな運命を生きないといけないのか。

エルフのもとへ向かうと話を切り出したあと、マツケーロはアルティアのもとにドレスを贈ってきた。もともと、変装と山越え用に衣服は頼んでいたが、その中に一着加えられていたものだった。

そのドレスはイチジク紋様とウサギ紋様の入ったものだった。それを見た時、アルティアは思わず泣き出しそうになった。

イチジクは多産をあらわすモチーフで、ウサギのほうは強い繁殖力を持つ動物ということで、妻が身につけるものだった。それも高貴な身分の女性には似合わないものだ。変装用とはいえ、それが何を意味しているかは明らかだった。

（お前は自分のものだと言いたいわけですわね……）

少なくとも、式もあげる前からこんなものを贈りつけるのはデリカシーに欠ける行為と言うほかなかった。こんな儀礼もわきまえぬ者に嫁ぐのか。

「ペルセネ、わたくしは耐えますわ。だから、どうか王国を再生させましょう。わたくしたちの手で」

「はい、アルティア様」

ペルセネはふるえているアルティアの手をとった。

アルティア一行十一名はバネドで一泊したのち、山越えの道へと入った。

エルフ側の案内人が山への入口で待っていた。このまま自治領までエルフの後ろをついていくしかない。

「ここまで低い尾根から登らなくても、副都から山を進む道もあるでしょうに」

エルフがいるのもかまわず、アルティアが毒づく。低いところから登るほうが楽ではあるだろうが、大幅に距離が長くなる。

「エルフたちは草や木を踏むことを嫌います。尾根伝いの道は樹木の数も少ないから、彼らにとってはよいのでしょうか」

「ペルセネ、詳しいのですわね」

「何代も前にエルフの血を引く者がいました」

罪を告白するようにペルセネは言った。エルフが差別されているわけではないが、閉鎖的なエルフの血を引く者が都市にいることは珍しい。

「そういうえば、ペルセネの耳、かすかにとがっていますわね」

「特徴は体に出ますからね。そういうえば、昨日の酒場の男も、あまり見慣れない色の目をしていましたね。どこの出身なのでしょうか」

アルティアは登山用の靴で足元の石を軽く蹴った。

「アルティア様が珍しく興味を示された、あの偉そうな態度の男……。傭兵か何かでしょうか。自分の力で世を渡ってきた目をしていました」

「そして、王城にはいないタイプの目ですわね」

アルティアは皮肉交じりに付け加える。

コーティアにいた貴族たちは、自分たちの命脈を保つことしか頭になかった。国を壟断しようだなんて、気概すらない。自分の身をまっとうすることだけに、あくせくしている者が大半だった。

「ああいった何をしているかわからない輩も、本当はアルティア様には寄せつけないのですが」

「わたくしは、あの男、そこまで低くは評価していませんけどね」

「あら、アルティア様、あんな粗野な男がお好みですか？」

「そんな話ではありませんわよ。あの男は、どこか不遜でしたわ。隣にいた桃色の髪の方も愛人か何かでしょう」

「けれど、遊び女にしてはやたらと身分が高そうな立ち居振る舞いでしたわ」

「駆け落ちか何かでしょう。正面から口説かれたことなどないから、傭兵風情の口車にはだされるのです」

「やはり、うさんくさい男ですね。マツケーロとは違う意味でタチが悪い」

「しかし、そんな不遜さも何かを変える時には必要なのですよ」

アルティアは後ろを振り返る。

かなり高台まで来たらしく、王国領のあたりまでが見渡せた。  
「取り戻しますわよ、必ず」

山中の道のりはかなりの強行軍になった。

山を自分の足で登ったこともないアルティアのペースは徐々に落ちてきた。  
彼女の足は窓際にずっと飾られている人形のように細い。

「アルティア様、朝から歩きどおしです。ご休憩を」

疲労が濃くなってきたアルティアに、ペルセネは気をもむ。アルティアのことをとことんまで気遣うのが侍女であるアルティアの役目だ。

「ここで休んでいるうちに国が減んだらどうしますの？」

アルティアは足を止めようとはしない。

ペルセネはアルティアの腕を強引にとった。

「アルティア様が倒れてしまつては何の意味もありません」

その目をじっと見つめ返してから、アルティアは小さな声で、

「この程度の疲労で倒れても死ぬことはありません。戦いに敗れた魔札使と違って」

そして、その手を無理矢理に払った。

「わたくしは魔札使ではありませんが、王国のために戦います。戦場で命を懸けることもできませんが」

「わかりました。生まれた時からアルティア様は強情ですから」

ふっと気が抜けたように、ペルセネは微笑んだ。

「そう育つたとしたら、乳母子のあなたのせいですわ」

足を引きずりながら、アルティアは次の一步を踏み出す。ペルセネ以外の従者は心配そうに見つめてはいるが、声はかけない。彼らはアルティアの言葉に忠実に従うことだけが求められている。その例外がペルセネだ。

王族の子供は幼い頃、自分の母親ではなく、乳の出る家臣の若い女に育てられる。それが乳母で、その娘がペルセネだった。

そのため、ペルセネとアルティアは身分は異なるとはいえ、姉妹のように同じような環境で育てられた。

「大公国も我々の側につくことになりましたわ。計画は乱れもなく進んでいます。このまま上手くいってくれば、わたくしたちに勝ち目はありますわ」

「エルフがこちらにつくかどうか、大きな賭けですがね」

わかりきったことだからか、ペルセネの表情は言葉の割に冷静だった。

「エルフたちが我々の側につかなければ、我々は拘束されるでしょう。そこですべては終わりですわ」

エルフと事前に話がついているわけでもなんでもない。アルティアは一からエルフに候

国攻撃の決起を促さねばならない。連中が落ち目の王国のために参戦してくれるかどうか。「毒ナスはペルセネも持ってきていますね」

「はい。仰せつかったように」

「ならば、何も恐れる必要などありませんわ」

話とは不似合いなほど、アルティアは翳かげのない笑みを見せた。

王国の歴史の中で、自決の道を選ぶしかなかった者はそう珍しくはない。

失敗したとしても、ありふれた結末が待っているだけだ。

「憂国の王家に生まれなければ、また異なった人生があったのでしようが、わたくし、後

悔はいたしておりませんから」

アルティアはペルセネに笑みを向けた。

「わたくしは幸せですわ」



最後まで立ち読みしてくれて  
どうもありがとう！  
続きは本で楽しんでね！